様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成２１年　３月３１日現在

研究種目：若手研究（Ｂ）
研究期間：2007-2008
課題番号：１９７３０４０７
研究課題名（和文）　現代における子どもの自立の意味
——生きにくさを抱える子ども・親・支援者の視点から
研究課題名（英文）　Reconsidering the meaning of “Jiritsu”(independence) as a goal for children

研究代表者
東村　知子（HIGASHIMURA TOMOKO）
奈良女子大学・文学部・助教
研究者番号： 30432587

研究成果の概要：
本研究では、障害児者および不登校を経験した若者に焦点をあて、現代における子どもの自立の意味について考察し、以下の三つの視点をえた。第一に、自立を個人の問題としてではなく「他者との関係」においてとらえること、第二に「受動性」ではなく「能動性」によって自立を定義すること、第三に、「学校のはしごを順調にのぼり、就職して自分の家庭をもつ」という典型的なライフコースが自立への近道であるという暗黙の前提をとらえなおす必要があるということである。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００７年度	600,000	0	600,000
２００８年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
年度			
総　計	1,100,000	150,000	1,250,000

研究分野：グループ・ダイナミックス、子ども学
科研費の分科・細目：教育心理学
キーワード：生涯発達、自立支援、学校教育、障害児者、不登校、親

１．研究開始当初の背景

（１）子どもたちの自立をめぐる状況

近年、子どもが自立すること、おとなになることが難しくなっているといわれてきた。2000 年ごろから、「ニート」や「パラサイトシングル」が「問題」として、メディアによって頻繁に取り上げられるようになり、関連する書籍も多数刊行された（たとえば、山田、1999；玄田・曲沼、2004 など）。しかし、「おとなになること」の意味は多様化しており（苅谷，2006）、その基準はもはや自明なものではなくなっている。にもかかわらず、こうした言説の中には、それらを不問に付したまま、「自立できない若者」の問題を、現代の日本社会が抱える諸問題と結びつけて、人々の不安をあおるようなものが少なくないように思われた。

（２）心理学における「自立」研究

心理学においても、自立は青年期の発達の課題として注目され、多数の研究がなされてきた。たとえば福島（1992）は、中学生、高校生、大学生、成人に対して質問紙調査を行

い、「精神的自立」と「社会的自立」の二側面からなる心理的自立尺度を作成したうえで、その発達的変化を検討している。高坂・戸田（2006a、2006b）も、質問紙調査を用いて心理的自立を測定する尺度を作成し、その尺度を実証的に検討している。しかし、これらの研究は、研究者が自立の意味を定義し、あらかじめ用意した項目への回答を求めるものであり、そもそも「自立とは何であるのか」ということが十分に問われているとはいえない。また、年齢による傾向の違いを見出すことでそれを発達的変化としているが、一人一人の自立のありようは、はたして年齢で切り取ることができるものなのかという疑問が残る。

２．研究の目的

本研究の目的は、障害児および不登校を経験した子ども（若者）とその親、彼らに対して支援を行う者の視点を通して、わが国においていま子どもが自立すること／子どもを自立させることの意味を究明することである。具体的には、子本人、親および通信制高校や障害者授産施設等の支援現場で支援を行う人々に対するインタビューを行い、それぞれの立場からみた自立の意味を明らかにすることを目指した。さらに、それらを重ね合わせることによって、自立のより豊かな意味と自立をみる新たな視点を浮かび上がらせ、よりよい自立支援のあり方を見出していくことを最終的な目的とした。

３．研究の方法

本研究は二つのテーマからなる。それぞれの方法は以下の通りである。

（１）不登校経験者とその親・支援者にとっての自立

サポート校および通信制高校の卒業生・在校生７名に対してインタビュー調査を実施した。過去の自分を振り返ってもらうことにより、不登校の経験やサポート校・通信制高校に通ったことが、今の自らの人生にとってどのような意味を持つのかを聞きとった。１名の卒業生については親子でインタビューを行い、親子の視点の違いを探った。彼らに対して支援を行ってきた通信制高校教師からも、自立をどのように捉え、それに向けてどのような支援を行っているのかを聞き取った。

（２）障害のある子とその親・支援者にとっての自立

障害児をもつ多くの親にとって、特に高校を卒業した後の子どもの自立は非常に大きな問題である。そこで、わが子が就労したばかりの親と支援者に対するグループインタビューを行い、子どもの自立がいかに語られるのか――子どもの特徴やこれまでの発達、社会的な制度などといかに結び付けて語られるのか――を分析した。通園施設や授産施設で障害児者に対する支援を行ってきた指導員にもグループインタビューに加わってもらうことにより、親の自立観との違いと共通性を明らかにした。

４．研究成果

テーマごとに研究の概要とえられた成果を記載し、最後に全体的な成果について述べる。

（１）通信制高校・サポート校の生徒の語りにみる学校教育と現代の若者の自立の問題

①研究の概要：3 の「方法」で述べた 7 名の協力者のうち、3 名（D さん、A さん、E さん）のインタビュー結果を中心に分析を行った（東村，2009）。この 3 名は特に、自らの夢について詳しく語ってくれた人たちである。D さんは全日制高校に通っていたが、2 年生の終わりにクラスメイトとけんかになり、相手にけがを負わせて前籍高校を退学になった。D さんは通信性高校を卒業し、インタビュー当時は、保育士を目指して実家を離れて大学の児童学科で学んでいた。A さんは小・中学校で不登校を経験し、サポート校に入学した。高校時代にギターと出会い、現在はプロとして演奏活動を行っている。E さんは 17 歳で、通信制高校に在籍中であった。中学生のころに恐喝などの事件を起こして少年院に入り、通信制高校に入学した。在学中に妊娠し、娘を出産後高校に復帰した。

上記の 3 名を中心とする協力者の語りを整理した結果、四つのカテゴリーを生成した。東村（2009）では学校教育と自立の関係について考察するという目的に照らし、「親との関係」を除く、「夢」「過去に対する思い」「学校および教師への思い」の三つについて検討した。

②えられた成果：第一に、協力者たちが自らの「夢」に出会い、それをふくらませることができたのは、あくまで学校の「外」であったこと、また、彼らが夢への一歩を踏み出すことが可能になったのは、たとえ不本意であったとしても、通信制高校やサポート校に入ったからであるということが見出された。

第二に、協力者たちは自らの過去の経験（非行や十代での出産など）に対して後悔していないと述べていた。人生におけるできごとの意味は不変ではない。一見マイナスに思える過去の経験も、それから先に経験するできごとや、過去を振り返るいまの心情、将来への希望の有無などによって、その意味づけは大きく変わりうる。ただしその一方で、「普通の高校生でいたかった」、「できちゃった結婚はするべきではなかった」というような矛盾する語りも見られた。このことは、彼らが現在の新たな視点から自らを捉えなおして

いることを示すものだと考えられた。
第三に、学校でどのような経験をしたとしても、子どもたちにとって学校は簡単に拒否できるものではないということが明らかになった。多くの子どもたちにとって、ふつうの生徒として学校の中にいることができれば、それが最も安心であり楽なことであり、それは学校からはみ出してしまったように見える者も同じではないかということが見出された。
これらの結果にもとづき、学校教育と子どもの自立との関係について考察した。私たちがある人を「自立している」、「自立できていない」というとき、どこかで「学校のはしごを順調に上り、就職して経済的に独立し、自分の家庭をもつ」という典型的なライフコースを思い描いているのではないか。たとえ、職業や家庭をめぐる私たちの規範が変化し、また厳しい不況で正社員でさえ明日に不安を感じるという現状があるとしても、このライフコース（以下〈コース〉）への信奉は、いまだ根強く残っているように思われる。大多数の人々にとって、この〈コース〉に乗っていることは、もっとも安全であり、自立しているとみなされるための近道なのである。
本研究で取り上げたのは、この〈コース〉のまさに最初のところで、つまずき、はみ出して（あるいははじき出されて）しまった人たちである。しかし、通信制高校やサポート校は、彼らが再びこの〈コース〉に戻ることを可能にする。その結果、夢に向かって一歩踏み出したように見える彼らをみて、私たちは「いろいろな経験をしたが、最終的に立ち直った」と評価するのではないだろうか。ここで問題にしたいのは、そのように〈コース〉に戻ってきたことを立ち直ったとみなしてしまうことである。はみ出してしまった人たちを容易にそれでよしとできないほど、この〈コース〉の規範は強い。そして、この規範の端緒は、子どもたちを同じ年齢で区切り、みんなと同じであることを求める学校にあると考えられる。
近年、大部分の人々がより長い期間「学校」に通うようになった。さらに資格社会と呼ばれるいま、どの職業につくにも資格が求められ、その資格をえるためには、何らかの学校で学び、試験に合格することが必要とされる。本研究の協力者たちのように学校の外で夢を見つけたとしても、その先にはまた学校のはしごが待ち受けている。
ひるがえって、現在の学校教育をみると、子どもたちは将来必要になる「はず」の知識や技能、能力を、それが本当に将来の自分の生活につながるという実感もないまま、ただ将来のために身につけることを求められている（浜田、2009）。実際、多くの人の場合、学校で努力して身につけた知識のほとんどは、学校教育のはしごを上るためにのみ使われ、大学に入学したとたん剥げ落ちてしまう。そうであるならば、学校教育のはしごを順調に上ることのできた人が自立に近く、そこからはみ出してしまった人が自立から遠いとは、もはやいえないのではないだろうか。
では、はみ出すことの何が問題なのか。それは、〈コース〉からはみ出すことで受ける社会の厳しいまなざしだと思われる。そして驚くべきは、子どもたちにとってもっとも身近な存在であるはずの教師が、そのようなまなざしを強くもっているという事実である。本人がどれほど反省し、やり直したいと思ったとしても、人々はその人の「いま」ではなくネガティヴな過去を見て、その人を容易には受け入れようとしないのである。
しかし、本当の自立支援は、いま目の前にいる子どもや若者と、一人の人間としてしっかりと向き合うことからはじまるのではないだろうか。本研究で取り上げた人たちの経験は、現在の学校教育、ひいては今のおとなたちが、子どもたちの自立を支援しえているかということについて、大きな問題を提起している。

（2）障害児の母親の語りにみる障害のある子どもの自立と親子関係の変容
①研究の概要：就労して1年以内の障害者の母親2名（Aさんと Bさん）と、就労に際して親子の支援に携わった施設X園の職員1名（Yさん）に協力していただき、インタビューを行った（グループインタビュー）。藤原さんと吉川さんの子どもは、ともに20歳代の女性である。Aさんの子どもの障害はダウン症であり、現在は、NPO法人が障害者の就労の場として運営する喫茶店で働いている。Bさんの子どもは知的障害があり、清掃会社に就職してビルの清掃の仕事をしている。インタビューは、全員の許可を得て録音し、逐語録化した上で分析を行った。その結果を文章にまとめたものを協力者にフィードバックし、再度2名の母親に個別でのインタビューを行った（フィードバックインタビュー）。
②えられた成果：グループインタビューの結果から、以下の三点が見出された。第一に、自立とは、子どもが周囲の人々のあいだで支えられ、また自分自身も誰かを支えるという関係を生きることである。重要なのは、ただそこにいられる、居場所があるというだけでなく、その人がそこにいる意味を他者に認められるということである。第二に、自立とはもう一方で、親がわが子の強さ・成長に気づき、手を離していこうと一歩踏み出せることである。障害の有無にかかわらず、子どもは知らず知らずのうちに親から少しずつ離れていっている。そこで必要になるのは、親が

そのことに気づき、自らも意図的にそれを促していくことではないかと思われる。また第三に、一言で就労や自立といわれる中に、人によってさまざまな形がありうる。「自立支援」とひとくくりに言われるが、たとえ同じ「若者」や「障害者」といっても、十人いれば十通りの自立があり、十通りの支援のあり方があるということをあらためて確認する必要がある。

続くフィードバックインタビューにおいて、母親たちは、いつのまにか自分自身が娘に支えられていたこと、娘を離していこうとしつつ離せていなかったことに気づいた。このようなフィードバックインタビューを行った意義として、以下の二つがあげられる。一つは、筆者による解釈を文章という形で返すことにより、協力者の「自らについての分析」を可能にしたことである。第二に、新たな対話の場を生成することによって、上述のような新たな気づきが生まれたことである。このような試みと考察を通して、「プラクティス（実践）としてのインタビュー」という研究上の新しい視点が見出された。

（３）全体的な成果

現代の日本社会において、自立ということばは、障害者や若者の問題にかぎらず、一つの重要なキーワードとなっている。自立に関するさまざまな言説に共通するのは、自立できないこと（自立していないこと）が問題とされ、自立は個人が目指すべき望ましいありようであるということはほぼ自明視されているという点である。

しかしながら、こうした「一般的」な理解に対しては、批判もなされてきている。たとえば松本（2006）は、「いまやかましくいわれている『自立』は、たちの悪い『恫喝』にしかみえない」と述べ、「恐怖政治の力学」の存在を指摘している。松本は、私たちがこの恐怖政治に抵抗し、いかなる状態が「自立」であり「依存」であるかという定義を拒絶することが必要であると述べている。また、堅田・山森（2006）は、Fraser & Gordon（1994）に依拠して、現代の「自立」およびその対としての「依存」の意味が歴史的・社会的につくられてきたものであったことを指摘している。私たちが通常「自立」と捉えている「労働して生きていくこと」は、かつては経済的な「依存」状態とみなされていた。しかしながら、産業資本主義の台頭とともに、賃労働が「自立」として読み替えられることになった。このような変化にともない、単なる社会的な従属関係であり、あらゆる人に共通する状態と考えられていた「依存」が、個人的な資質を意味するようになったのである。

これらの論は、通常の自立という概念を相対化し、そのことばの背後にひそむ権力およびその構成性を明らかにしようとするものであり、興味深い。しかしその一方で、自立という目標をもつこと、またその目標について語ることは、親や教師が子どもを育てていく上で、また子ども自身が育っていく上で大切な役割を果たしている。自立をいわば解体するようなアプローチだけでは、そのことばが有していた積極的な意義まで捨て去ることになる危険性はないだろうか。

このような観点から、本研究では、特に十代後半～二十代の若者に焦点をあて、彼らにとっての自立の意味を、本人と身近な人々の生のありように沿って探究してきた。また、これまでの心理学における自立研究に見られるような大規模な質問紙調査ではなく、少数の事例を詳細に検討することによって、その人固有の自立のかたちについて考えてきた。

その結果として見出された自立の意味、および自立を捉える視点は、以下の三点にまとめられる。

①「他者との関係」による自立の定義：鯨岡（2000）が「自立とは常に他者からの依存と他者への依存のはざまに浮き立つもの」と述べているように、自立とは他者や社会とのあいだのできごとであり、子ども（個人）の自立の問題という捉え方には限界がある。（２）②で述べたように、自立は他者との関わりなくしては成り立たない。したがって、自立の問題をより広く周囲の人々との関係の中で――たとえば親子の生き方の問題として――とらえなおしていく必要がある。

②「能動性」による自立の定義：鷲田（2007）によるケアについての論考を下敷きにするならば、ケアされないこと（される必要がないこと）すなわち他者に依存しないことが自立ではなく、他者をケアしている（できる）ことこそが自立であると考えられる。このように、「受動性」ではなく「能動性」に基づいて自立を定義することにより、一般的な就労が難しい人々であっても自立は可能であるといえるのである。

③「典型的なライフコース＝自立への近道」という常識に対する疑問：（１）で述べた〈コース〉という観点は、障害のある人々の自立について考える上でも有用である。1979 年の養護学校義務化により、障害をもつ子どもも、学校教育のはしごの中に自動的に組み込まれることになった。しかし、彼らの多くは 18 歳で高等学校（養護学校高等部）を出たとたん、そのはしごから放り出されることになる。「就職して経済的に独立し、自分の家庭をもつ」という部分は、多くの障害のある人々にとって依然としてハードルが高いことは事実である。しかし、上述の②の観点から自立を捉えるならば、本研究の事例として取り上げてきた若者たちは、十分に他者をケ

アできているのであり、その意味において自立しているといえる。自立という概念を拒否するのではなくこのように作り変えることによって、他者を糾弾するためでなく、他者と自らの生を豊かにしていくために、それを用いることができるようになるのではないだろうか。

文献

Fraser, N., & Gordon, L. 1994 A genealogy of dependency: Tracing a keyword of the U.S. welfare state. Signs, 19(2), 339-336.

福島朋子　1992　思春期から成人にわたる心理的自立――自立尺度の作成及び発達的検討　発達研究，8，67-87.

玄田有史・曲沼美恵　2004　ニート――フリーターでもなく失業者でもなく　幻冬舎

浜田寿美男　2009　子ども学序説　岩波書店

東村知子　2004　サポート校における不登校生・高校中退者への支援――その意義と矛盾　実験社会心理学研究，43 (2)，140-154.

東村知子　2009　学校教育と現代の若者の自立――通信制高校・サポート校の生徒の語りから　子ども学モノグラフ，1，16-29.

苅谷剛彦（編著）　2006　いまこの国で大人になるということ　紀伊国屋書店

堅田香緒里・山森亮　2006　分類の拒否――「自立支援」ではなく、ベーシック・インカムを　現代思想，34(14)，86-99，東京：青土社

高坂康雅・戸田弘二　2006a　青年期における心理的自立（Ⅱ）――心理的自立尺度の作成　北海道教育大学紀要（教育科学編），56(2)，17-30.

高坂康雅・戸田弘二　2006b　青年期における心理的自立（Ⅳ）――心理的自立の発達的変化　北海道教育大学紀要（教育科学編），57(1)，135-142.

鯨岡　峻　2000　親子関係はどう「発達」するか――依存と自立の絡み合う様相　児童心理，726，17-22.

松本麻里　2006　百億の「断食芸人」　現代思想，34(14)，116-123，東京：青土社

鷲田清一　2007　思考のエシックス　ナカニシヤ出版

山田昌弘　1999　パラサイト・シングルの時代　筑摩書房

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　１件）
①東村知子，学校教育と現代の若者の自立――通信制高校・サポート校の生徒の語りから，子ども学モノグラフ，1，16-29，2009，査読無

〔学会発表〕（計　４件）
①東村知子，障害のある子の自立と親子関係の変容――母親が語る娘、自分、家族，日本発達心理学会第20回大会，2009年3月24日，日本女子大学
②Tomoko Higashimura, Co-construction of meaning of “Jiritsu”(independence) as a goal for disabled children. International Society for Cultural and Activity Research 2008, 2008 年 9 月 10 日，University of California, San Diego
③東村知子，障害をもつ人々の就労と自立――母親と支援者による意味づけから，日本グループ・ダイナミックス学会第 55 回大会，2008 年 6 月 15 日，広島大学
④東村知子，活動システム理論とは何か：適用の実例と拡張　教育場面における応用，国際文化活動研究学会第 1 回国際アジア大会，2007 年 9 月 7 日，武蔵工業大学

〔図書〕（計　０件）

〔産業財産権〕
○出願状況（計　０件）

○取得状況（計　０件）

〔その他〕

６．研究組織
(1)研究代表者
東村　知子（HIGASHIMURA TOMOKO）
奈良女子大学・文学部・助教
研究者番号：30432587

(2)研究分担者

(3)連携研究者